

あとがき

日本の外交政策をめぐる議論に長らく巣食ってきた硬直的な二項対立の図式をいかに崩せるか。本書が編まれた背景には、編者である佐藤と川名が顔を合わせるたびに交わしてきた、かくもいささか挑発的な議論があった。この企てを書籍のかたちで世に問うことを決めたとき、まずは研究上の考え方が近い上野、齊藤に協力を仰いだ。専門分野が少しずつ異なる4人がそれぞれに目一杯、手を広げることで本全体としてかなり広範なテーマを扱うことができるようになると思ったからである。幸いにして、執筆陣には各分野の第一線の、そして次代を担う30代から40代の研究者を迎え入れることができた。執筆を引き受けて頂いた方々には、短い期間のなかで細かい指示、加筆・修正依頼に応じて頂いた。改めて御礼を申し上げたい。

序章で述べたとおり、本書の多くの章では日本外交が抱える課題に対し、あえて二項対立の問いかけや規範的な論点（～すべきか）を提示した。むろん、そのような問いに対してわれわれは何らかの「正解」を示したわけではないし、示せると考えたわけでもない。われわれの目論見はそうではなく、たとえば旧来の二項対立の図式が形成されてきた歴史的な背景や要因のセットを明らかにすることで、日本が現実に向き合わなければならない外交・安全保障上の論点を熟思するための「構え」を示すことにあった。しかし、そうであるがために、明瞭な答えを期待した読者にとって本書のつくりはやや物足りないか、そうでなければ相当の回りくどさを感じさせてしまったかもしれない。

とはいえ、外交政策はつねに多様であり、現実の社会はつねに複雑であることは言うに及ばない。あちらを立てればこちらが立たず。この言い古された言葉が政治や外交の本質を言い当てているのだとすれば、とりわけ初学者には既存の二項図式のなかに保存されている「明瞭」な答えに頼るのではなく、自身の言葉で、固有の主張を作りあげていく機会を得てほしい。インターネット上で拾える安易な答えに飛びつくのではなく、本書が示したような未解決の課題や不確かな将来を受容し、じっと思考する、その居心地の悪さに耐える力を

養ってほしい。本書がねらったのはむしろそこである。

もとより、そうした試みが十分に達せられたかどうかは定かではない。そのじつ想定する読者層を広く想定したがために、テキストとしておさえておくべき事項とテーマの先端性／専門性の配置のバランスにはことのほか苦心した。また、テーマによっては対立的な論点を抽出することがそもそも困難である場合も少なくなかった。これらすでに明らかになっている課題については、われわれの次なるプロジェクト（法律文化社より刊行予定）にてその解消をめざしたい。すでに始動している当該プロジェクトでは、本書の問題意識をそのままに、テーマを絞ったうえで既存の二項対立の図式を超えるための思考の枠組みを読者に提案するつもりである。

最後に、法律文化社の上田哲平氏との信頼関係が本書の質の向上に大きく寄与したことに触れておかなければならない。われわれと同世代の上田氏は本書の企画に当初より賛同くださり、編者・執筆陣を励まし、度重なるスケジュールの遅れにも寛容でいてくださった。氏の尽力なくして本書は誕生していない。この場を借りて、厚く御礼を申し上げる。

2018年2月

川名 晋史